山梨医大紀要　第15巻，74－76（1998）

過疎地域の子育て支援における保健婦の役割

太田真里子

本研究の目的は過疎地域における子育ての現状を明らかにし，それにより子育て支援における保健婦の役割を追究することである。過疎地域の乳幼児と母13組を対象とし，家庭訪問により子育ての現状を地域との関係の視点から調べた。その結果，母が地域のなかで孤立して子育てを行っている現状が明らかになった。また，保健婦の役割として，母と地域住民の双方へ地域住民が子育てのサポート源として位置づけられるように働きかけること，保育園入園前の母子への発達を促す遊びを援助することが考えられた。

キーワード：子育て支援，過疎地域，保健婦

１．目　的

保健婦は地域住民の子育てを行政サービスとして支えていく役割を担ってきており，少子化の進む中で，育児サークルに代表される乳幼児を持つ母親同士を結び付ける援助が多くなされてきた。一方，過疎地域においては，近隣のつながりが深く，筆者が先に行った調査では，健診で保健婦が継続援助を必要としたケースは家族や近隣とも関連した育児上の問題を抱えていた。そこで，本研究では，過疎地域における子育ての現状を地域との関連という視点から捉え，保健婦が子育て支援で果たすべき役割を追究する。

２．方　法

１）対象地域の概要：人口５,907人，面積130km^2，高齢化率34%，平成９年出生数30人，保育園２ヶ所（３歳以上が対象，ただし３歳未満も受け入れ可）の山間部。町の保健事業として月１回乳幼児健診が行われている。（対象：４・７・10・13ヵ月，１歳６ヵ月，２歳，２歳６ヵ月，３歳，５歳）
２）研究対象：平成10年５月の町の乳幼児健診に来所した17組のうち同意の得られた13組の母子。
３）調査時期：平成10年５月
４）情報収集方法：家庭訪問による面接を行い，母に出産後から現在まで振り返り自分の育児について語ってもらう。
５）調査項目：家族構成，母の年齢・職業・出身地・現在の家での居住年数，児の乳幼児健診の受診状況・受診理由，乳児期の子育ての相談相手，近隣との交流，散歩・遊びの範囲ならびに相手，保育園通園の有無，行政への要望

地域・老人看護学講座
（受付：1998年８月31日）

３．結　果

１）家族構成：核家族２世帯，複合家族11世帯（敷地内別棟居住２世帯を含む）であった。また，核家族の１世帯は住民票上は父方の家族との複合家族であるが，実際は町外に居住しており今後同居を予定していた。複合世帯11世帯の内訳は，父方の家族との同居は７世帯，母方の家族との同居は４世帯であった。
　１世帯の平均の家族員数は5.5人，世帯平均子どもの数は2.0人であった。対象児が第１子なのは７人であった。
２）児の年齢：１歳未満３人，１歳以上３歳未満２人，３歳以上８人であった。これは町の健診が乳児健診，幼児健診を同日開催しているためである。
３）母の年齢：27歳～37歳で平均32.5歳であった。
４）母の出身：町内出身が５人，県内出身が５人，県外出身が３人であった。町内出身の５人のうち４人は母の実家に居住していた。
５）現在の家での居住年数：実家に居住している４人と実際は町外に居住している１人を除く８人の現在の家での居住年数は３年未満３人，３年以上５年未満１人，５年以上４人であった。
６）母の職業：母の職業は10人が主婦で最も多く，２人が自営業，１人が教員であった。
７）町の健診：これまでの健診を全て受診していた児は10人で，うち２人はさらに乳児期に対象月以外にも受

表１　乳児期の子育ての相談相手

相　　手	人　数
実　母	9
同　居	4
県　内	3
県　外	2
夫	2
実　姉	1
友　人（町外）	2
近　所	1
栄養士（町健診時）	1

診をしていた。３人は１～２回の未受診があった。母が健診に期待していたことは，「児の発達が確認できる」６人，「専門家の意見が聞ける」２人，「母親同士の交流」１人であった。

８）乳児期の子育ての相談相手：表１のとおりであった。

９）近隣との交流：ぼこみ（近隣に児を御披露目する行事）または初節句に近隣を招いたものは11人で，家族などの身内のみで行ったものは２人であった。近隣を招いた11人のうち「人数が多く大規模でびっくりした」，「嫁としておもてなしがたいへんだ」などの感想を持った母は５人で，全員町外の出身であり出身地にはこのようなしきたりがなかった。

また，これまでの子育てにかかわる近隣との関係について，悩みや思いを語ったものは７人いた。「公園に行っても子どもがいない」，「母子ともに友達がいなくて大変だった」など他の乳幼児やその母と交流がないことに関する悩みは５人が経験していた。３人は若い人がいないので気晴しもできずストレスがたまったと語った。「近所の人が突然紙おむつの処理方法を確認にきた」，「年寄りばかりで児が甘やかされる」など近隣の子育てへの関わりを否定的に感じているものは２人だった。

さらに，これまでの子育てを振り返って語ってもらうなかで，「集落で行事の簡素化を話し合うつもりだ」，「周りに子どもがいないことがずっと嫌だった。でも，近所の人々に見守られて声をかけてもらえることは子育てにとっていい環境だと６年半経って気がついた。」などと積極的に近隣に働きかけようとしたり，近隣の子育てへの関わりを受け止める母自身の気持ちの変化を語ったものが２人いた。また，「このように自分の子育てを聞いてもらう機会はなかった」と語ったものが１人いた。

10）保育園：対象児の９人が通園しており，内訳は３歳以上の全児８人と２歳の１人であった。入園理由は，友達がいない６人，保護者が自営業で多忙のため２人（２歳の児を含む），引っ越しがきっかけ１人であった。また，３歳以上の児の入園時期は引っ越しがきっかけの１人を除いた７人全員が３歳であり，２歳の児は１歳８ヵ月であった。送迎手段は自家用車４人，徒歩３人，保育園送迎バス２人で，保育園まで送迎する７人については母が送迎する５人，父また母が送迎する１人，祖父が送迎する１人であった。

11）保育園入園前の児の散歩・遊びの範囲：町内在住の12人の散歩・遊びの範囲は自宅のみが６人，近所へもいくが４人，町外の母の実家１人だった。１人は保育園入園前は町外に在住し公園などへ出かけ他児との交流があった。自宅のみの６人のうち，２人は保護者が旅館業のため家族が外へ連れて行くことは不可能であり，自宅で従業員や客など家族以外と接する機会が多かった。また１人は「団地や公園を廻ったがだれもいないので自宅で過ごした」と述べ，１人は「母が近所へはあまり出歩きたくなかった」と語った。近所へも行く４人のうち，３人は母が散歩に連れて行き，近隣住民に声をかけられる経験があったがそのことに対する特別な受け止めはなかった。残りの１人は，日中の育児者である祖父母に連れられて，近隣住民宅に出かけていた。他の乳幼児と交流があるのは入園前に町内に在住していた11人のうち１人であった。

12）保育園入園後の遊び：保育園に通園している９人の保育園以外の遊び場は近所４人，自宅のみ３人，町外の公園２人であった。町外の公園を挙げた２人は，町内の近くの公園は利用していなかった。遊び相手は家族のみ５人，家族と近所の児３人，家族と近隣住民１人であった。近隣住民と遊んでいる児の集落には中学生以下の子どもは本児と兄妹のみでった。母は近隣の高齢者宅へ遊びにいっている現状を「近所の人からかわいがられている」と肯定的に捉えていた。

表２に示すように，遊び場を入園前と比べると，自宅のみが少なくなっていた。なお，入園前に自宅と近所が遊び場だった３人のうち１人は町外に居住していた。

13）行政への要望：行政に要望のあるものは11人で14件だった。その内容は，公園や児童館の設置・保健センターの開放など遊び場の設置の要望が７件，保育料や延長保育，送迎など町立保育園への要望３件，児童手当の充実１件，若者が住む宅地の開発について１件の合計11件，10人が高齢者対策のみでなく母子施策の充実を望んでいた。また，乳幼児健診については２人が要望（受付時間について，保健指導の充実）を持っていた。

表２　保育園入園前後の遊び場

場　　所	入園前	入園後
自宅のみ	6	3
自宅と近所	3	4
自宅と町外の公園	0	2
合　計	9	9

４．考　　察

１）過疎地域における子育ての現状

過疎地域では，生活の単位である集落に１人しか乳幼児がいないことも多く，今回の研究においても保育園入園前に他児との交流はほとんどみられなかった。母親は，他児との交流がないことに悩んだり，交流を求めて保育園に入園させたりしており，子どもの成長には他児との交流が重要であると認識していることが確認された。

また，町の健診の受診率も高く，子どもの発達確認をすることや専門家の助言を得る，他の母と交流をするなど各自が目的を持って参加しており，保育園や健診などの社会資源を積極的に活用している現状も明らかになった。

一方で，入園前の遊び・散歩の範囲が自宅のみに限られていることや，相談相手が同居していない母の実母が

最も多いことから，母が地域のなかで孤立して子育てを行っている実態が確認された。これは母が町外から「嫁」という立場で地域へ入ってきたことや，交流できる同じ立場の住民がいないことが一因と考えられる。また，本来地域が母子を暖かく迎えるという目的の伝統的な儀式（ぼこみ）は，母には嫁としての立場での近隣とのつきあいとして負担感を与え，目的を果たしていなかった。さらに，地域との交流を考えたときに，母親自身が述べているように，周囲に子どもがいないというマイナス因子に関心が集中し，近隣住民を子育てに使えるネットワークとして認識していない。そのため近隣住民と結びつき，活用していこうとする働きかけはなされていなかった。このように，子育てにおいては母子は地域の一員とはなりえておらず，また，母自身も地域とのつながりを子育てに活用しようと考えていないということが明らかになった。

２）保健婦の子育て支援のあり方

⑴ 地域のなかでの子育て

母は地域のなかで孤立して子育てを行っているが，散歩に出た母全員が近隣から声をかけられていたり，ぼこみでの近隣住民の参加が多いことから，近隣住民が母子を暖かく見守っており，子育てのサポート源となり得るといえる。しかし，これらの体験を子育てを支えるものとして認識している母はいなかった。また今回の調査で，母自身が地域を視点に入れて子育てを振り返ることで，支えている地域に気付いていた。このように，母が地域住民を子育てのサポート源として認識し，活用していけるような働きかけが必要であると思われる。そのためには，乳幼児健診等で母自身が自分の子育てを振り返り，また地域へも目を向けられるように意図した機会をつくることも必要だと考えられる。

同時に，地域住民に対しても，子育てを支えているとの動機づけを行い，伝統的な儀式の負担感を軽減するような働きかけなどが必要と考えられる。

⑵ 発達を促す遊びの援助

自宅内で家族のみで過ごすことが多い３歳前の児に対し，身体的・社会的発達のために外遊びや他人との関わりを促すことは不可欠である。

また，今回の調査では他児との交流を求めたり，遊び場の設置の要望が多かったが，今後の課題として，どこでだれと遊ぶかという母の要求に答えるだけではなく，遊びの内容や家での過ごし方についての現状を把握し，援助について検討することも必要と思われる。さらに，現在母子の遊び場所・相手の範囲を広げている保育園に関しては，入園制限の緩和などさらに子育てに活用できるような働きかけも検討されるべきである。

参考文献

１）井出知恵子（1997）地域における育児サークルに関わる看護支援に関する研究，千葉看護学会会誌，３(2)：34-40
２）標美奈子他（1998）子育て支援と組織活動Ⅳ育児力を考える，地域保健，29(5)：54-65
３）望月香生，太田真里子他（1997）過疎地域における子育て支援の特質，第19回全国地域保健婦学術研究会講演集：122-123

Abstract

The Role of Public Health Nurses in Supporting Child Rearing in a Depopulated District.

Mariko OHTA

The purposes of this study were to identify the state of child rearing in a depopulated district and to clarify the role of public health nurses in supporting child rearing.

The subjects were 13 couples of mothers and children. The data were collected from interviews during visits to their homes.

The results were as follows :

１）As regarding child rearing practices, mothers and children kept their house and didn't seek useful connections with their neighbors.

２）Public health nurses need to have the mothers recognize their neighbors as the supporters of their child rearing.

３）It is necessary that public health nurses appeal to people in the community to give support to mothers.